



特別
イ 4
3163
15



Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.

春

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.



續千載和歌集卷第一

春哥上

春のこけいこもよきはけり

前中納言定家

いづれ目もあはれにけり
春の浪にせりや春の
嘉元二年百首歌のたまふ

入道平太政大臣

おさまの代にけり
春の雪の上をり
りめの春のこけいこもよきはけり

は白皇御孫

やまの氷もけり
春の風もけり

弘長元年は清我院の百首歌のたまふ

お大御孫の家

春の雪もけり
氷もけり

帝皇井入道お大御孫

お大御孫の
春の雪もけり

是の

七律の法隆寺

いづれ目もあはれにけり
春の浪にせりや春の

順徳法隆寺



あつし年の年をおけいし山ろく霞をわけて春をよ
夢のりりてちくときて

郁方つばあ

雲をまねやうつまつく霞のくらくと春をよ

見しらす

八河内新恒

春乃し所ふ夢のくまをまきつていともまきつ

三年右左衛門家の屏風

紀伊貞久

春立てぬの日よるねんうらむとわいふあひの

千六百番寄合

兼中御書は家

山をまよふの雲くしんわい曾まのうらむ

春乃寄の中

母の山とねの朝日の春のまにたの雲今わい

位子ねまーくはらまきうへれをのこさる

の寄つまうりけのりつてはうまやみ

け

飛山反御書

谷のまきつすいづる雲のまきく時を春をよ

おな〜ん

今上御書

とらふ今もいふに春分をさのつるの心は
百有歌もさしついでに

法皇御製

家のをきつる方ねの梅もさしたるの家の後
建保四年日暮の百番ま合

八降反高合名

家のすにいふに梅もさしたるの家の後
別つる

源道所

はまたの春もさしたるの家の梅もさしたる
近花御所の屏風

船便

いかにさる家の梅もさしたるの家の梅もさしたる
子也百番ま合

惟明歌年

つるすの都の春もさしたるの家の梅もさしたる
見つる

道因法師

梅もさしたるの家の梅もさしたるの家の梅もさしたる
正治二年はる月反十有番ま合

は京極権政のたのむ

家の草もさしたるの家の梅もさしたるの家の梅もさしたる

實治二年は漢城院より百首歌を奉りし
き春を

藤大ゆき乃氏

しけろふは春の光あさきりあすのうらな香
弘安二年岳山院より百首歌を奉りし時

道長大守氏

あさきりあすのうらな香あさきりあすのうらな香
春の光あさきりあすのうらな香

反清製

しけろふは春の光あさきりあすのうらな香

伏見院御製

春の光あさきりあすのうらな香
二月餘寒のしけろふは春の光

後二條院御製

しけろふは春の光あさきりあすのうらな香
實治二年人しけろふは春の光
とよまやめしけろふは春の光

後漢院御製

春の光あさきりあすのうらな香
住持社よりしけろふは春の光

井大徳の家

江戸にえやま所のうららかなるあまのまきこよのこり
寛文二年女所入内扇風子

常盤井入道おたけ

とんこのひよつちまよつこよて常盤の家の
常盤の葉とよよとよよやね

はる清整

油のうまはたか香とよよてはまね
弘安百そきくまつりし時
入道おたけ

口まつむゆらうねれをねうまのうまはた
かえ百そ歌をまつりし時

おたけ

いづれどののり守り書かぬかまのりま
護徳の家扇風子春日野子りま
さくらん

大中に能宣削に

かきしき春くるしとねのりま
つなよよ

清原はる義

よるていと春のこまりらん
弘徽殿女御の合あひま 花はな

相楫

春のこわこの厚みや霞日と
松と霞のつらさ

順徳院の製

又のやと霞のつらさ
洞院接収家百首歌子霞

藤原信實卿

いさこのよのたれに
藤原信實卿

常盤井金造の歌

春霞のよに
春を争い乃ゆ

前傍の通性

春のまた霞を
實は百首方にてま

前大納言の歌

衣のこころの
百首争い乃ま

前大納言の世

けふの春はすげうけふの春はすげうけふの春はすげう
正治二年百々々々々々々々々々々々々々々々

後京極権政おとせ

のこころの春はすげうけふの春はすげう

柳を

藤原信実の

春はすげうけふの春はすげう

お中納言信実

浅緑の春はすげうけふの春はすげう

香中梅の

今上御教

きこやきも梅の春はすげうけふの春はすげう

右原の

けふの春はすげうけふの春はすげう

春の香中梅の

鳴まよふ春の梅の春はすげうけふの春はすげう

二羽け

のこころの春はすげうけふの春はすげう

後深田

いもろく人多しとて女せよ梅の枝かこしむるまじし春
建長二年はるかとちりせしはけの時江と
春多し
あ大仙の家の家

るよいうや冬よのせし梅のよとにみちるる春の葉
あ中仙の家

むめろやまじしとて女せよ梅の枝かこしむるまじし春
あ大仙の家の家

いもろく人多しとて女せよ梅の枝かこしむるまじし春
あ大仙の家の家

弘安下り哥とて女せよ梅の枝かこしむるまじし春

大森の隆時

いもろく人多しとて女せよ梅の枝かこしむるまじし春

弘長三年四月末に百首をてまはけの時

あ大仙の家の家

別れ人多しとて女せよ梅の枝かこしむるまじし春

あ大仙の家の家

いもろく人多しとて女せよ梅の枝かこしむるまじし春

あ大仙の家の家

おきくくうに露乃せまきん風まらぬのよにまら
田廬のいと 永福つ流

「おきよの道」やまよふをそのたむをたむをたむを
申文

おのりいふなまにゆく屋敷に「おきよの道」をたむを
百なりうとまらりし

念道おちるなり

おきよの道に「おきよの道」をたむをたむをたむを
中勢の宗寺の歌

おきよの道に「おきよの道」をたむをたむをたむを
おきよの道に「おきよの道」をたむをたむをたむを

寛平元年時后宇智合のころ

紀友則

春雨の美は「おきよの道」をたむをたむをたむを
千六百番号合

後宇智権藤の歌

おきよの道に「おきよの道」をたむをたむをたむを
おきよの道に「おきよの道」をたむをたむをたむを

贈徒之位の字

おきよの道に「おきよの道」をたむをたむをたむを
おきよの道に「おきよの道」をたむをたむをたむを

前園自去以去

源兼氏相見

方大納言為使

和名求知

或子日取也

和名求知

和名求知

鳥羽は清和

和名求知

和名求知

和名求知

和名求知

和名求知

松七のたよりをよみしに
實は百の千と申すは
ついで

山階舎方下

よき事なりしをいふに
可き事なりしをいふに

松申納す雄

松申納す雄
松申納す雄
松申納す雄
松申納す雄
松申納す雄

方下

山階のたよりをよみしに
弘安百の千と申すは
ついで

前太儀雅有

山階のたよりをよみしに
弘安百の千と申すは
ついで

常盤井入西のたより

山階のたよりをよみしに
弘安百の千と申すは
ついで

真秋つ院丹は

あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
ふあつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし

皇太后宮太后御成

あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし

皇太后宮太后御成

あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし

皇太后宮太后御成

あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし

皇太后宮太后御成

あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし

皇太后宮太后御成

あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし

あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし
あつたはるのうらみのせうやねの橋の橋をこし

續千載和歌集卷第二

卷下

實治百そ哥りけのばいて十惜花

後清成院所製

いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
西園ち八道ち太政大臣下家二首
あはれとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる

兼大仙の歌

なつとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる

源重之女

春の日の花よ心のあふれてお早し人とみえぬつらさ

藤原清輔朝臣

早ねの心や思ふにたづねて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる

後住持寺入道左衛門大夫下

ての月とえとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる

順徳院所製

かめくさちけゆく山の栞むらさちのまきるる雪かきりたる
うのつとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる
いふよりねとて思ひ日まされぬとて人なとてうらみさるる

人の心はくさる可もよとせし

鎌倉をた下

こよりのふし入けんやまゝ人ころあふす一れむおんか
ふせといつらん

淡天つ後

よりのふまふ橋おきまきくはよりあましまし一はののき

并大ゆきあは

ちし山よりとれむ乃橋まひらうらるるねの白き
百も平ふてまのし時

六降りた下

白きれたらるちいや山の木のしすは。梅さし

ふ三位の突

大原やとがの梅さきぬ 結代のねうら白き

ちし山よりとれむ乃橋まひらうらるるねの白き

百も平ふてまのし時

横方ゆき伝

白きれたらるちいや山の木のしすは。梅さし

平白時加下

こよりのふし入けんやまゝ人ころあふす一れむおんか

前大納言後支

震い川をちのぶこねあつて又日に火山の梅下
百首歌をまゐるの時

内大下

を乃美い方と云ねやしてせよなをわねのあつち
題をす 郭首親王

かつもや高まは震立と云よるに也又もねを
志え百首歌をまゐるの時也

入道お大い下

ふつらも乃あつちあつちいかにさきとまり六座の

百首三首をまゐるの時

二京は親王覚卯

さきつくといふはなと久とつて震のまゝにわらふ電
をの争の申す

津守國助

三山木のまげとて楊子まぢの枝にまゐるをいふ

徳治二年三月廿合

方大下

別の春もいふもまた人の重のこりて楊よりいふ
百首三首をまゐるの時

前用白太政大臣

きしきやまにぬむしうしうて梅のちりて
ぬえ花と
は白御歌

うさしよ昔のすしきくむいこつよ春のうさ
今といまこころ又安を中任し御海
はーわさまの中よ

権中納言藤

さるんやまにぬ里あれたとよしむむむ
今年有歌よまを給うけり

浮島羽院御歌

むゆにまのぬる金りかたれ者をとけて春風うさく
あな花とよしむ

入道二品親王性册

すんすーいある金もきんんぬらりころ昔ちぬれ
む奇け中よ

源氏朝臣

ふんゆく昔乃春にむしけし又ころころぬき
天徳四年田表歌合

中務

年しにむらうりある梅の庭に今ハ立ちまうし

花川段所付中文め所方子てかしのりちて
とねのりつて傳かへてちつて平一
ませ後しよのりちの

源後頼朝

十二回をいしてのりすく凡をね年其果

平直時附片

山橋をいして又これ山橋をいして命せり

前大仙の東

山をいして又これ山をいして

山安百て平くしてまらり西

安嘉つ後四降

いふり人もまたあやのりちのりち

深壁つ後十好

山をいして又これ山をいして

とる人きり

そのりちのりちのりちのりち

白河をいして又これ白河をいして

松石助を長家

立直しをいして又これ立直しをいして

白河段所付

いふにきにかし様とわつ物たりてあまきつる春の
たす大丈頭帥

おむとていふとあし様心のまじにわつと
千五百巻の合

野実友下

いふりましとわつとあし様心のまじにわつと
あちの世すあや春日社首平

中下

民部之官教

いふとあし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと
あし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと

順即親王

わつとあし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと
花平中

法平長壽

あし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと
平宣刑

平宣刑

あし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと
藤原隆信刑

あし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと
前大助の心

あし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと
あし様心のまじにわつとあし様心のまじにわつと

寛治八年八月高僧院平合稿

中納言重信

春風よそよそと吹くを想ひとるればとられしう

きりし

花山院所製

霞よふゆめ想ひつゝたに人すそとて春あす

大宰権師の作

ふらふらとさしつかすのよき山枝ちねはらうすの風の

かえりたすきすま下りし時

藤原公方

いづりよろしに風のまをすにちの精ははば

定保四年は鳥居の首歌にてまふりけり

赤儀雅経

春風いぢりつゝおのれうろ子山梅

久可の寺おとけり中

津守國助

梅をうけてわらうたむけふぬきとるあきう春の

情落むといふも

九条力太

るをのちのえきをともさうそつらうら梅が

かきそりてまふりし時

入道方太政大臣

まのてんろ若木乃んよりやすき口の後にさきいふる人
雨は落せむ

前同白太政大臣

あつみのさきんらん上風すもろのたきすけの藤原
花子の中より

中野乃恒明親王

きつ下風とのところうたふれ十子むすぢしん
後にはつ入道白家乃合花下明月

後連法師

むのし目とろいよむかむつこいあひうちるとたて
修理大支頭季人くむ十そ歌あませはひ

後光朝王

ねとねいんわりけの梅むちつと文うたれいまふ
大西乃経信

可内大臣

春風のおもまよ内とそむちりあむねの梅さむらひ
ふれはむのさう文かけけりあひの梅いさむらひ
山河のむのちういそアア

後二位氏人

おえ百そ奇にすまふ一時

律守國冬

いんごちのゆるゆるのいんごち

はる下定の

凡のうきをみれば山積の可そ奇にすまふ

又承平年内裏十首奇に奇に奇に

とよ

お大御そめ氏

おとのこすのうきまふおまふおまふ

硯のあたまふくもいんごち入道お大御そめ氏

いんごち

休見後御製

ちりさよおとけとたよおとけおとけ

いんごち 入道前太政大臣

こころえのうきおとけおとけおとけ

いんごち

後守極極後前太政大臣

こころえのうきおとけおとけおとけ

いんごち 後鳥羽後御製

こころえのうきおとけおとけおとけ

お大御そめ氏

位二位家隆

しきりたるまゝあつたかたのしるしとてしるす

永曆二年四月内書云公橋

修理大夫頭李

君におもひまゝにいぢりて山桂又るおりに号しおのりて

月茂院へ云まづりけり

常盤井入道おたけ下

山里のこゝろなる人の殖すやありてむむいふありて

永仁二年三月内書云人々く之首云

あまげりて山路なる

藤原の道朝臣

ちかまといふやうにげのふちといふやうにけしむん

身といふといふらふとよませ落す

伏又後御製

ふろふしはつらゝのむちいふやうにけしむん

のの舟中よ 葎壁つ辰かの

あふちをいふよのなきせとて春さくむちりて

西園寺金吾右衛門下

みの上におぬまのまゝとけしむる春さくむちりて

為五早見不見人といふらふ

大江山

あはれこゝろに
徳の家乃并合

今と伝

伊子の文と
今と伝

今と伝

百首并

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

あはれこゝろに

お大ゆくの氏

三寸とあり寸又とせねがけのゆかりにちやちよと春
春曉月とくさるる

伏見院御歌

月影も陰よあちよのふれ又あけやわづらひのあま
近志の所はの所風

躬恒

ひよりの尺つらうまのさよのんあまのま
實は百首奇をまりけり難歌
前大ゆくの家

別三寸

右と左の所實

い春もんのまかりまうとよひさうくおれもとの藤
三條入五内ち下

隆信切に

松を月十をいええねとくさよのちの松よのち
えんつらうの家子藤のちのさけり

伊勢

りるよみはけちのむ藤のむまよりを
天徳四年由良奇合に藤

中納言朝志

心算のついでにけすなまきり打之てまゝより毎のついで
屏風の繪に松と藤のうゑり所

平軍盛

心算のついでにけすなまきり打之てまゝより毎のついで
頭之りす 大けは能宣録に 考成

為原孝経

心算の目守をむりきりきりきりきりきりきりきりきり
寛治二年万首等子情也

山階倉造方下

心算の目守をむりきりきりきりきりきりきりきりきり
頭之りす 右方下

心算の別とせしきりきりきりきりきりきりきりきり
可首等子情也

岡白内方下

心算の目守をむりきりきりきりきりきりきりきりきり
精本即之書也

心算の目守をむりきりきりきりきりきりきりきりきり
言春のついでに西園寺入道等方下

ちりるをのひけえのめあふと春のふねは
人くはあそびまじりしる川に
後鳥羽院御歌
いづに春のふねのふたへ
ちりるをのひけえ

續千載和歌集卷第三

夏哥

寶治百首哥のてまのけの百首友

衣笠内天下

春の三杯のちりるをのひけえのめあふと春のふねは
四月一日よとほし

和良式部

きよよとほしのかげまのちりるをのひけえのめあふと春のふねは
八月のころとちりるをのひけえのめあふと春のふねは
春のふねは

まことねんしんしんあしあし春すまわしと

承又四年四月身有殿身合印

大京大之頭補

あまふふのりよとよとてふのれとさきせるわのれ

千代百首身合

二季後澄成

外まふる月めいしんまにん山部平上

弘土百首身合

寺死つ尻神

すこのえなる元さき部とをいしもの一移

題さす寸 ありん

いねと口の言まぢけ部とをいしもの一移

亭子後身合

在厚え方

みいしんまはとくさ部とをいしもの一移

題さす寸 前大御

かのうにまわあま下部とをいしもの一移

賢法百首身合

松陰草

ほんまふるねあまらふいしもの一移

かみい
開自家新十信

おはすまのいさむらひの
おえり百首開すまらりし所部と

まらねてまじらむよ
女衣儀指経

百首方すまらりし所部
お方下

いさむらひのいさむらひ
あえり百首開すまらりし所部と

井岡白太は下

部々いさむらひのいさむらひ
友の寄りの

前大納言師重

いさむらひのいさむらひ
身作字

いさむらひのいさむらひ
慈道は秋王

部々いさむらひのいさむらひ
と河原と

あゝいさむらひのいさむらひ
いさむらひ

仗入辰御書

一又於人前に言ふに都を以て其の教を以て

法橋頭胎

又し其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

まはるるに其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

平時云

し其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

藤原泰十年

其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

如申ゆを季能

口其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

辨大由の国季

其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

前助言の後定

し其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

休大辰御書

其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

其の言ふに其の言ふに其の言ふに其の言ふに

の衣をいひていふ部をうらむ

其法、師

まゝいふもあなをさげ

伴規

ほいもつふあまをまじり

賤同部をいふらむ

源道清

部を在明の目よりいふ

人の肩のふり部をまじり

源道清

れをいふたふ無中は

友平の中は

山より身ていふた

権中師の藤

またいふもあなをさげ

實法万有弁

後漢教院師表

りいまたいふもあなをさげ

あふゆくの世よまや

有原の定朝

弁中

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

平定時相に
題する

京極金匱を用白方天下

人といふものいふまの部とていふところす

東部といふこと

大宰不貳方を

まゝんまの守りあり部とていふこと

東暦三年日食は青赤令部といふ

はけり

権中助言直後

わけいふ人いふこと

わろし

領子内親王家格律

ゆめりし方いふこと

八

後徳大寺方天下のりいふこと

そまよふ人いふこと

てはりいふこと

わけいふこと

方赤のりいふこと

すいふこと

わさよに部といふこと

所開白方天下

おたしむるものいふこと

東部といふこと

所開白方天下

晴乃島のやうき(一)をなまらしてしく部を

ひきしりす 伏見院新相

ほのきりすおをまわしるあひのよきおのちのちのちのち

東福の院

部をいふたのよききりすしりすしりすの

弘長二年春の院より有るすしりすの

山階の西下

ほのきりすおをまわしるあひのよきおのちのちのちのち

あひのよきおをまわしるあひのよきおのちのちのちのち

るすしりすの定象

あひのよきおをまわしるあひのよきおのちのちのちのち

家元合十の薪井のしりすのちのちのちのち

光明寺の定象

あひのよきおをまわしるあひのよきおのちのちのちのち

源部長のちのちのちのち

あひのよきおをまわしるあひのよきおのちのちのちのち

實証の音奇のちのちのちのち

後部成成

大月おのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

あひのよきおをまわしるあひのよきおのちのちのちのち

邦々々のるるを以てしるすに
十六の番に計るる

野史に於て

カキコトシテ水長
二品に親王家を中首とす

津守國道

カキコトシテ水長
中首とす

カキコトシテ水長
下首とす

身天唐安大夫後成

カキコトシテ水長
唐栢著意といふ

其後

カキコトシテ水長
題する

平作貞

カキコトシテ水長
百首計り

権大納言

カキコトシテ水長
栢

中首弁の妻を嫁しける

信島院御製

都々介の妻はつとむるの女ありては心平に空

嘉元百首弁の妻はつとむるの女ありては心平に空

贈従二位為子

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

久末百首弁の妻はつとむるの女ありては心平に空

貞太后実太之孫成

有月の方の御る都々介の妻はつとむるの女ありては心平に空

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

昭慶院御製

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

従部成貫

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

康守國四

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

おはすあはれおはすあはれとて月をばしはるる

Levin's ...

... the ...
権集の實性

... the ...

... the ...

... the ...
高麗宗成朝に

... the ...

前岡白太守下

... the ...
題云々
前大納言方家

... the ...
... the ...

先明孝子入道おぼはな下

... the ...
... the ...
前大納言道昭

... the ...
... the ...

権中納言の處

あまの国をめぐりては
え所百首并に妻のけり

中野の御歌

あまの国をめぐりては
千史百番并に

皇太后家女御成女

又てはねあまのまは月と日と
名所百首并に

大内貞重

あまの国をめぐりては
あまの国をめぐりては

弘長三年の裏百首并に守る

曉月

大内貞重の女

五首のあまの国をめぐりては

寶治百首并に

ませぬ

後漢我段師歌表

あまの国をめぐりては

物河

中野師貞相見

あまの国をめぐりては

赤内大内通

うんふねくすむかしの...
たはらひしおろせの...
おんえん平首歌をまゝの...
新大納言の世

うん舟せうし...
順徳院の世

おん...
新恒
又平の...
院師表

建保五年四月庚申の首よりなる時

春儀雅記

ちん平の...
首...
院師表

ちん平の...
從二位宣子

そこの...
院師表

院師表

いまのちのこころはわびにけり

徳山院御教

かきついでにわびにけり

孝入の首女

亦大徳のせしむる

平首女

藤原行房朝臣

友平のこころはわびにけり

管とよまを

夕立也

後部成久

おしなへつる方なごころ

題三寸

中臣祐賢

秋のわびにけり

弘長百首奇

前大徳言

すまじきもの

野三寸

宇治名通

よさわびにけり

建保四年

新中納言定家

なまもとのうぐいすねふるまはるるくまのち風
久末万首平三まふりける時

上西院さま

あふらふをわづらひしむすまふりけるに
ふ階の筆方た下安の十首言納本

海魚の如し

せきつるをのしむらひなるちまふりける
なまのちの道知り

なまのちの道知り

あふれかゝる風ふあすきてあふりまふりける
あふりまふりける

新中納言

あふりまふりけるあふりまふりける
あふりまふりける

大後公道順

あふりまふりけるあふりまふりける
あふりまふりける

南白河公方

あふりまふりけるあふりまふりける
あふりまふりける

赤尾合田公方

あふりまふりけるあふりまふりける
あふりまふりける

昭訓公俊春

あふりまふりけるあふりまふりける
あふりまふりける

口から吐き出す一糸の糸も...
室宿の首首...
の首

次泉大母下

ふいせいの...
百首...
の首

身大命大支所成

こころ...
千五万番首合...
の首

は鳥羽院御歌

こころ...
の首

續千載和歌集巻第四

秋歌と

百首...
の首

入道...
の首

い...
の首

中務...
の首

け...
の首

千...
の首

惟明親王

こころ...
の首

題三寸

光明寺入道を招致す

このまにたんとてたのこはのまふてい

中御言家お

いまふてまふりす

いかに

いかにせうはをい

亭子院哥合哥

よこ人三

天阿のこりてあらうせうた

飛山院位下松ましくげ

人くそ首哥めさあ

前大御言為家

あまの河いさきと

後京招持母前大御言

かあひのろいさをう

まのこ

前大御言有肩

いまふて家の契れ

八百五裁のつもと

前板取れりて子にけりて

選子内親王

あきまてなる心のなむ思やわあはれりて暁るる

弘安百首并みまふりける

入道前大臣大臣

あけいもいへせらるるは三つ下またあめすた

題きり

源重長相見

七夕の夜とすけをに袖のしるきりて

同月とるこよ

前中納言定房

奥のたぢりやめこの守りてこひなりを天の

大祓文にすまきを流しける字首并中納言

後島羽流御製

あきまてなる心のなむ思やわあはれりて暁るる

題きり

守りてなる心のなむ思やわあはれりて暁るる

弘安百首并みまふりける

前中納言定家

あきまてなる心のなむ思やわあはれりて暁るる

弘安百首并みまふりける

二條院讃は

よきよき女のおこしきうてりあつたを松葉の
還懐百首奇よこ侍けり花

身大所安丈夫後成

わの袖おきおりのちしらひやりよめくかじり
寛和元年内裏奇合し花

萃山院御製

おきよきよきけのちかたまらして神まつらいたま
ふえ百首奇よこ侍けり花
権中助を雄

口きりおしよつわおきよきよき涙まらよと花

おきよき

泣眼廢黠

おきよきよきおきよきけよちの夜おきよきよき花の
風

弘永百首奇よこ侍けり花

入道おきよき花

多きおきよきおきよきけよちの夜おきよきよき花の
風

弘永百首奇よこ侍けり花

赤大帥おきよき

おきよきよきおきよきけよちの夜おきよきよき花の
風

弘永百首奇よこ侍けり花

花

ていふまじかしのねつる庭のねし中が秋のま

は二降良侍妻

やいとよよふをいんねしつらふおまむりおま

田中秋夕といふし

前中秋の定貞

よいよあめてきくねてきくねのよふといふ

秋希の中よ 二品は親王覺助

今更なにいししとていんねのよふといふ

前大御言行長女

このねいねふよるにやふむんうきや元とん

手久時

いよせん物ねし秋のねあまてあう秋のね

あえ百首言てまふし時

大政大臣

そのいへねかすまよし秋のつらやねあま

定曆二年 日東 詩哥合子水江秋夕

はり我大臣

三ちせふりうを奉れりて露や秋のよふ

題をよす 在義の院

ねよあね秋のねや草まてふよるをいふ

皇子内親王

久しのおんさうのいはちかきものいふ風は
近きと
近きと

いふとらたのむきはさうりあまのいふ
近きと
近きと

いふまよのいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

久し之うのいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

いふいふいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

いふいふいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

いふいふいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

いふいふいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

いふいふいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

いふいふいふいふいふいふいふいふ
近きと
近きと

又所百首可之しま下けの子

僧正行意

こゝましと跡此の仕いささきよりいふに人

是よりす 大仰言接人

うすやふらるすれとみ并くしちし出し

後徳大寺方大下

おまよりいさ人よりいふ安きの并くしちの文

そけ忠公奉十

あき秋れそよりいふわてさく唐の語をいふ

元永五年 祐子の親王家可合子

相傳

露むす小秋れ下葉やきつものん秋の原に

唐よりあり 小弁

あかしの秋の葉をいふ

百首奇言小弁のしりあ 前園白方下 押小波

あかしの秋の葉をいふ

忠房親王

あかしの秋の葉をいふ

秋平中下 從三位有紀

女筆のつらひく火かきよめおかしみのいひしりあかしく
名所百首奇しきまふりしものさしりあかしく

五位知家

くろせむいふいふはく
はるまじまらぬくぬり
題すす

はるまじ

早あはねつらりし物
さえ首首奇しきまふりしものさしりあかしく

前中納言経法

くわなまねまふりしものさしりあかしく
はるまじまらぬくぬり
はるまじ

ハルマシマラヌク
行念法師

はるまじのねのこたさ
中務の宗吾親王

さるまじのねのこたさ
月下庵と
ほね院の曲侍

さるまじのねのこたさ
前大納言経法

月見のつらひく火かきよめおかしみのいひしりあかしく
討月庵庵と子とせ

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

平宗泰
別名

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

平宗泰
別名

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

平宗泰
別名

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

平宗泰
別名

平宗泰
別名

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

平宗泰
別名

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

平宗泰
別名

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

平宗泰
別名

十のくちの田中のおもたれ現にたむはくはし
はるかに

屏風文

船櫃

万里を思ひきつゝるは、梅の心づゝに有ける
影ぞよ

人麿

中よりよき舟の道にまきぬといふは、舟の心づゝに
千六百番奇念

信鳥羽は内装

物の字のまのふとて、舟の心づゝにまきぬといふは、舟の心づゝに
百そふとくまふりしは

橋中御言方藤

あまの川よき舟の道にまきぬといふは、舟の心づゝに

藤中厚

田舎下入道赤南白大は

杖の心づゝにまきぬといふは、舟の心づゝに
藤中厚

藤原宗泰

まの心づゝにまきぬといふは、舟の心づゝに
大に糖

大に糖

舟の心づゝにまきぬといふは、舟の心づゝに
百首奇念

は京定方

舟の心づゝにまきぬといふは、舟の心づゝに
は京定方

前大細言長雅

三ノ目付けしるはしきりまのちしんあき
永福の院

ふ七のちしきりしるふのちしきりしるのちしきり

又承二年八月十日亥之首哥合子未七月

権中助之雄

里人れむらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

先佐朝臣のまませはげの首哥子

藤原隆秋朝臣

八月十日まらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

八月十日まらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

藤原實方朝臣

八月十日まらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

大御方の家

八月十日まらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

入道方は方凡

八月十日まらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

休又位信三松まらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

前大御方お世

八月十日まらしきりしるあきりしるあきりしるあきり

月前の事

氏部々定致

ふのころの事いふにけりてまたねむりつる月

前開自大のたの家讀時

そやねむりたあつても冬の前は月をそへた

信實朝臣

ころは氣いふにさしてしむるをさるる月

坂河右大臣

半とあつてしむるにすむる月のことあつた

性助け親王家の十首言

ねむり

は眼源系

まきいつたの月いふにたぢひとせに秋風を吹

たしとす

紀津島朝臣

まきいつたの月いふにたぢひとせに秋風を吹

津守國文

木まきむせぬとつちとさし神あつたれ秋の月

平貞久

雨りく三日月あつたに月あつたに秋の月

二降大集大后定校録

すしつとあつたに月あつたに秋の月

おとす人—女のこゝろをまはす月が多きはたはたか
おとす人—

續千載和歌集卷第五

秋哥下

月不撰處のつらさ

大西言経信

いとわづらひしつらさの月いづれもつらさ
月不撰處のつらさ

月不撰處のつらさ

おとす人—

大西言経信

いとわづらひしつらさの月いづれもつらさ

氏部卿實考

とある人たなと也其月しきとワレと
月乃奇也

前大傍公実家

いましてきとんす考との不いすま月
らるる

ちのてんがれち芝月のもてらちのたは

可首奇也

考せとちんか心んかちんか
前大傍公世玉川治社と奇合

一月

前内大臣重

つへにんかちんかちんかちんか
題之

氏部卿實考

いしとんかちんかちんかちんか
は久我田

ちのてんかちんかちんかちんか

遠保四年浪島羽杭と奇合

冬儀雅經

たのよ月と奇合

百首奇中 殿内院大浦

中の中なるまにけりてまむの月とに成り
藤原克俊朝 藤原院但馬

藤原院但馬

少すもいふまにけりて又見んかゆの如きまむ
題 子 臣の笑を

杖としてやいふまにけりて又見んかゆの如きまむ

前大徳公朝

いとあつめりていふまにけりて又見んかゆの如きまむ

平時造

人いふまにけりて又見んかゆの如きまむ

津守國道

ちかきまにけりていふまにけりて又見んかゆの如きまむ

百首奇中 子

少ね侍

あつめりていふまにけりて又見んかゆの如きまむ

皇太后宮女

いふまにけりていふまにけりて又見んかゆの如きまむ

皇太后宮

杖のまにけりていふまにけりて又見んかゆの如きまむ

月つるにかのとほしきうらむて月舟の影をたづねて
従二位行家人くすす仕けの任る社
十首三行合は江上月

前大船の女

すよえのねのねんをとおてうらむにけりよの月け
寛えい年なる月の比佳次すまよりて敬明
月とよしとよとよとよ

西園寺の女

すよえのねのねんをとおてうらむにけりよの月け
建治三年九月十三夜五首奇は江上

前右京東條の女

すよえのねのねんをとおてうらむにけりよの月け
秋寄の女は 窈窕法師
老女松青とかなとちあわをいりるを月夜なすむ

平養時朝に

すよえのねのねんをとおてうらむにけりよの月け
百首三行合は江上月

権中納言の女

すよえのねのねんをとおてうらむにけりよの月け
江上月といふらん

ほ二摩院御歌

かじつるねまゑる凡しらりよき入にふんじりし月

百そぎ中一

中務卿宗行親王

少はつたね風さしねほらみよのまのちの女

通助は親王家の事十そぎ舟中月

前中務卿宗定家

そらまゝの女のかたきふれいんかちん月

可きそぎ中一

は下空め

口ろく又のきふれいんかちん月

たぢり家持三介子月前脱死

丹波忠守朝

あつたつちるこり午室はすそふ月

題そぎ中一 権中御そぎ教

いせのふ人やそがせつるこり午室はすそふ月

山階入道ちちり家十首三首は月

津守国助

あつたつちるこり午室はすそふ月

たつ月

觀意法師

かつらと早ふらりるにくむくむく月下八
任有社とすうらけの十首奇申の海邊月

前大徳言の氏

ちいさい浦のよしの月けは浪しつとあつらふ
家也十首奇よ欠は行のよ山夜月

入道二品親王通助

とよくちかちかまうらよふくよのわらうたの月
ひきま

所領け親王

たよらまこのの月メとつと月はたかたつたの月

前大徳言のなせよませ侍一言のあつた月とよ

仔細

は平長輝

かわよじの我わらまといはけのつち又よのまの月

赤之百首奇とつまつる三月月

は平定方

とまきすよむ煙やのよあまのこのいやくうよすむ

今と位よつちおましくてのら後ね僧の月

うらわつて二回よまのりてちんはけり

慈道親王

人よもまらちんあつたのつちをけすあつた夜屋の

禁中月ノ下

春安権左有定

二月廿一日 親王家立十首齊子竹間月

三位為実

三月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

四月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

五月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

六月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

七月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

八月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

九月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

十月廿一日 武アツク明親王

前大僧正仁澄

太炊所の大空下女

あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より
あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

亦大細を伝え

なるまよとあまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

亦大細を伝え

あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

海上月 素還法師

あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

月入るいと入て

惠慶法師

月のつらばあまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

類一とす 藤原實方朝臣

あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

後身利院院君

あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

乃近朝臣

あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

藤原景経

あまのねむりにあまのねむりのまるとは月より

藤原

くまのふりしむいよとよ

源順

くまのふりしむいよとよ

建治三年九月十三夜五首可十野虫

大義卿隆時

おつらいつれをうすけの野虫ははるしおと

歌そと

亦攝政大臣

このふりしむいよとよ

百首可十野虫

昭訓院春自

たけてこころささくアミカマシ

前大納言為家百首可十

従三位家隆

きのこころささくアミカマシ

夕生とよと好けり

祿祇伯頭仲

よさかふらむか

弘長百首可十野虫

前大納言為家

よさかふらむか

同重とく(るん)

今上御製

つゆもよよむしのたけまきりくす草花枕より文

歌きしす

民部卿實孝

ふらやちまふしふしきあくるすもの候のたのしみ

春宮大夫公賢

いづみじやうむあきら原おさうよきまじ

前大納言カ世もませ何之首齊藤兼全

藤原兼成

霜むすあきらくまらくすりかきしほねあき

歌きしす

らかんをきす

みらあきらすくつおちりてまのねまじくおし

弘末百首青年まらりけい

ほろ内大尺

あきらよのそよきまきあきらすおれらるる月

かきま

土師(田)下

金のねらりねたのうしにすすすすすすすすす

百首奇人まつり

たぐり

そいちのそいのそいのそいのそいのそいのそいの

寶治百首并してまのりくふ田

身大后宮大夫板成女

とちまたのいかりるこひのたれ社やとちのこひをいかに

田家椿衣と玉道軒ト

よきこころのたのしみいぬては山田よりこゝろをいかに

家子七首并合しはげし凡も椿衣

光明寺の念并椿衣大下

衣ふきぬるもよとたまは山のふみは風うき

里椿衣と

は眼馬鬚

秋ふしとわねさきはのまて人ハたよきしよや衣うき

題不知

藤原顯盛

心ふれしつものいかにさしきね風うき都の衣うき

百首并まのりく

田大后

松里の月とくよのこころの山はさし又衣うき

女并中し

冬儀雅經

十のなをまきののたまひかたのあはれし里の衣うき

あえ百首并しすけりしと椿衣

前大納言俊光

まのりくにいんせうする里人のよきしと椿衣

同構衣といふるんを

今と御製

ふらふらしたるわらわあひなほついでにちかほむのさびのさび
以末百首奇しきまづりける

念道不方及下

ふらふらしたるすすあまのいまもや同まゝ欠て衣之

海邊構衣也 大江貞重

杖さしこころもあはれあま人はる欠て衣之御製
前大納言為家人より子せ侍り目吉社
子首末命湖邊構衣

前大納言為氏

きちめやかにかてるあまのあはれ衣浦風さる久しお侍
寶治百首歌之まづりける同構衣

皇太后宮大夫依成女

あちきちいぢねらうの杖まじりあちかきすの衣を
構衣の巻物とよみ

依見院御製

おもしろきわらわいよとよみ衣のせむしあはれ
おもしろ

遊義院

うらあつたあはれなをのちかきなるまよひの御製

白首正公のまゝ

忠信親王

月父の人の御子ありまはらば
持衣をまゝ

源邦長朝

月多しねをまゝの衣を

從二位直子

女のおよびまはらば

白首正公のまゝ

前大僧正雲雅

のあつるを三つてまゝの麻の衣

白首正公のまゝ

大茂隆持

女のおよびまはらば

龜山院御親

のよけの女の衣をまゝ

性即親王家卒有方

法眼源有

まゝの衣をまゝ

白首正公

皇太后宮大夫信成

山河の中のみなるこころをまてかゝるらん
近き侍時菊合十

藤原興凡

ちかひてむちまひの菊をわらふる子又の松の
二品は親王見助

杖よりきりきり霜のまき老せぬ物とす
菊の枝ははらへてまらぬやぬは

今に侍時

山人のこころのたもとよりまき
侍時

こころのたもとよりまき

重傳のころ
新院別當也

侍時代はたはわたり

永福院内也

のころのたのころす

百首集
前開白方大下
押書

口のたはたはたのころす

平時殿

ちかひてむちまひの菊をわらふる子又の松の

祝部成久

そいふおぼしむるの文は守るも守らぬも其のまゝに
旧院持女前左大臣

にのみよむいふたの杜乃少司馬おぼしむるに
前内大臣

るきりみむるのふりもさるる留しりもなす
紅葉一樹こころ

お中納言経徳

いはゆるあかしはるいふもさるる風ふり帯かたし
お中納言力助

玉梓の道の心してこのふりもさるる人さるる
可首司馬新時

前内大臣

さるるあかしはるいふもさるるのふりもさるる
前左儀経徳

権中納言左衛門

そいふおぼしむるの文は守るも守らぬも其のまゝに
信二位左衛門

そいふおぼしむるの文は守るも守らぬも其のまゝに

家子奇合し仔細のし紅きし

修理大夫顯季

久しきことふくみの紅きよあしーの凡てまよひたるを

是とてまよひ 清原元帥

とけらふのちのるお大の河わたるやせとてしす

貴人

こまろこよけしうれはりらふの冬とすくやうりまはる

水郷紅葉と 從二位家隆

たつと河とねのりらちちねいりこにら水のおんが

おえ百首奇しきまはりりし河紅葉

贈從三位方子

くた何このおとやううしじりらよとさうよわの風

題とてまよひ 藤原為嗣朝臣

うのゆりらとせりら人をかひつとこのよとて風

新院御製

ちりる庄のりららふのうとておの自らふとせし

永仁元年 岳の殿十首うし河紅葉

方大臣

大のほちのしとあきいふにしとまよひねのよとて

從三位師行

いふよむのなるはたのほにふむにふむの
暮秋菊のころら

伏見院御製

手十のころひひとあまのころあまのころ
和之年正月盡日十首二十曉情自

堤之位為理

出のころあまのころあまのころあまのころ
野々々

は二條院御製

いまたあまのころあまのころあまのころ
ふえ百のころあまのころあまのころ

前大納言のせ

あまのころあまのころあまのころあまのころ
久安のころあまのころあまのころ

二のころあまのころ

あまのころあまのころあまのころあまのころ
はまのころあまのころあまのころあまのころ
よのころあまのころあまのころあまのころ

前中納言のせ

あまのころあまのころあまのころあまのころ
あまのころあまのころあまのころあまのころ

續千載和歌集卷第六
冬哥

時節初冬のころのふゆのまじりけ

法身淨製

そのまじりけのまじりけのまじりけのまじりけ

山時

院淨製

そのまじりけのまじりけのまじりけのまじりけ

影

從二位家隆

かこち月まわりのまじりけのまじりけのまじりけ

後一條入道齊南白方大ら

けしきくたかきけしきくたかきけしきくたかき

中務の字守親王

としかやく煙とまじりけのまじりけのまじりけ

弘安百首并してまつりけのまじりけ

入道二品親王性明

あしあわたねあしあわたねあしあわたねあしあ

百首并してまつりけのまじりけ

權中納言の藤

あしあわたねあしあわたねあしあわたねあしあ

そのまじりけのまじりけのまじりけのまじりけ

十番の御書

春宮大又の御書

平賀藩の御書

前大僧の御書

平賀藩の御書

はる行塗

平賀藩の御書

前大僧の御書

平賀藩の御書

平賀藩の御書

平賀藩の御書

前大僧の御書

平賀藩の御書

平賀藩の御書

道合の御書

平賀藩の御書

平賀藩の御書

前大僧の御書

御書

あつさうせきののさしにむらじのほのぼの
野山院御歌

ありまよりしんばんにしりあけのうと舟ねる心

弘安百首奇りたまふりるこも

権中納言公雄

かじりたるこむらさきにさしたのほろけり

寛政百首奇りたまふりるこも

後漢院御歌

あつさうせきののさしにむらじのほのぼの

百首奇りたまふりるこも

前大納言後六

あつさうせきののさしにむらじのほのぼの

海一休しき田庭寒草

権中納言為藤

あつさうせきののさしにむらじのほのぼの

山階入道方女り家十首奇り寒草霜

津守國助

あつさうせきののさしにむらじのほのぼの

その奇りる 平政長

百首并てみまのしめ

田代

うつしあしとちくはのしまちの松よきかきりてうらな
題きり守 権大帥を實貞衛

ちいりし中ち又くは風とらて浦こけしなる流しき
寶治百首寺とまのりなる河海千鳥

参部御隆親

ちいりし中ち又くは風とらて浦こけしなる流しき
西園寺入信天改大日住右社とまのりなる河海千鳥
とて人くはよすせはけの女首并中冬

奇 津守國平

ちいりし中ち又くは風とらて浦こけしなる流しき
冬奇中冬 手重打

ちいりし中ち又くは風とらて浦こけしなる流しき
長弟元年内裏十五首并千鳥と

大炊御門右大臣

ちいりし中ち又くは風とらて浦こけしなる流しき
題きり守 初泉参部

ちいりし中ち又くは風とらて浦こけしなる流しき
藤原敏行朝臣

冬ノ月ノ暮ナリノ月ノ暮ニテハ

為道朝臣

冬ノ月ノ暮ニテハ

中務卿恒明親王

冬ノ月ノ暮ニテハ

前中納言定三郎

冬ノ月ノ暮ニテハ

冬ノ月ノ暮ニテハ

今上所教

冬ノ月ノ暮ニテハ

冬ノ月ノ暮ニテハ

冬ノ月ノ暮ニテハ

後二行家

冬ノ月ノ暮ニテハ

如願法師

冬ノ月ノ暮ニテハ

平時元

冬ノ月ノ暮ニテハ

藤原景俊

冬ノ月ノ暮ニテハ

江東百首奇にたまるはる

入道二品親王性助

きくふの華同の風いよまき心にて氷より浪のわが

氷初結とよしも

後二條院御製

あふまよしと浪となまにて平氏河はまらちて

白川殿七百首奇に尋綱代といふ

亦大徳下の家

あふまよしと浪のともいふまよしと綱代

江東百首奇にたまるはる

入道前太皇太后

あふまよしと浪のともいふまよしと綱代

百首奇にたまるはる

忠房親王

あふまよしと浪のともいふまよしと綱代

前村大徳を實稱

あふまよしと浪のともいふまよしと綱代

前大徳のあは

あふまよしと浪のともいふまよしと綱代

江長之幸内裏之首奇に曉霞

雲のくさあのおの月とともなきてすもあしむの雲の
影をよ 藤原方頭

よのほろくしよじりてかたの雲

院御歌

都のあしりよのさよふとよあかちちり

澄野は親王

より厚きわいそあしりていんこのものよるはつ

亦大徳をよせらるる河 春月社女中

津守國冬

のよしりよななたましはたのしん宮おゆをよせし

影をよ 平時有

とわあわのららとちくつりたのきよはよあわのの雲

冬の以修行 仔細

亦大徳を御照

風よむく米ち電のあしきいんすすよの目書

冬乃 仔細

うれむむあしりて今もいんて目こつりる書

後二條院御歌

いんまきよのそらみりりあたの香るあしり

祐子内親王家御歌

あまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

中納言家打

はまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

身大匠宮大夫信成

あまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

雪満衣といふる

は身御製

けあまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

別当寺

和見は親王

あまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

あまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

前大御方世

あまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

はみ餘内大匠宮百首奇は松村清吉といふ

藤原隆祐朝日

あまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

松音と

津守國助

あまのこころいかにまじりにあまのこころをいかに

雪のあまのこころいかに

前大僧正禪明

つらまきつる年とるねて尺づるまなきのまらねの香

題名

津守國助

きこねのよきいんまにまきこくわきの木の千え

大花の重經

千えとまきこくわきのまきこくわきの木の千え

藤原顯盛

ちりつらびりて尺づるまなきのまらねの香

二石行け所

ちりつらびりて尺づるまなきのまらねの香

相持

短くつらびりて尺づるまなきのまらねの香

大江政國

山つらびりて尺づるまなきのまらねの香

京仁三郎

津守國助

冬つらびりて尺づるまなきのまらねの香

題名

藤原宗行

冬つらびりて尺づるまなきのまらねの香

浦雪混浪

前大助

百首寄...
津守國名

久た河氷の上...
野宮...
野宮...
野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野宮...

野宮...
野宮...
野宮...

野々守 正明門院大夫

正明門院大夫の御書
正明二年十首并合曉書

從二位家隆

從二位家隆の御書
積書

山階入道大下家十首并十里書

源兼成朝臣

源兼成朝臣の御書

三善(遠傳)朝臣

三善(遠傳)朝臣の御書
三善(遠傳)朝臣の御書
三善(遠傳)朝臣の御書

三善(遠傳)朝臣の御書

三善(遠傳)朝臣の御書

長兼

長兼の御書
長兼の御書
長兼の御書

長兼

そとにわがいふ人 (Sawakata) にてわいら又いふ人

高野の舟より 前大徳言の世

十のついでにわがいふ人 舟のいふ人をもいふ人

ふえ 高野寺にまゐりて 舟

念道をたぬ人

三つにわがいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

題する 舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人

えとわがいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

舟のいふ人

舟のいふ人 舟のいふ人 舟のいふ人

いふは、
この世に
てはまうせ吹くせあるあちとせしる民のまこと
にまひて万代あつてあつての水穂の回り
やうなうた

かゝる

代に
都をなす

よる

たはちとくに

あつて
よる

かゝる

たはちとくに
よる

あつて
よる

か—はく—はく—はく—

息店宮さま後成

msc. 1001-1002 人かひなむしりてしちがひの

しんせうあうしり

な

隆信朝臣

あつしんせうあうしりてしちがひの

あつしんせうあうしりてしちがひの

折る奇

伏見院こいさかひの

りて元—はく—はく—はく—

あつしんせうあうしりてしちがひの

命をたはす

あつしんせうあうしりてしちがひの

あつしんせうあうしりてしちがひの

あつしんせうあうしりてしちがひの

前大田宮さま

あつしんせうあうしりてしちがひの

あつしんせうあうしりてしちがひの

隆信朝臣さま

あつしんくわんごんせつ
てんちんせつしんせつ
てんちんせつしんせつ

てんちんせつしんせつ

物名

まのえ

あつしんくわんごんせつ

まのえ
あつしんくわんごんせつ
あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ
あつしんくわんごんせつ
あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ
あつしんくわんごんせつ
あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ
あつしんくわんごんせつ
あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ

あつしんくわんごんせつ

わがまゝのしるしをよめりてはるるに
かた下

わがまゝのしるしをよめりてはるるに
かた下

わがまゝのしるしをよめりてはるるに

わがまゝのしるしをよめりてはるるに
かた下

わがまゝのしるしをよめりてはるるに
かた下

わがまゝのしるしをよめりてはるるに

わがまゝのしるしをよめりてはるるに
かた下

わがまゝのしるしをよめりてはるるに
かた下

わがまゝのしるしをよめりてはるるに

わがまゝのしるしをよめりてはるるに
かた下

わがまゝのしるしをよめりてはるるに

お月やのたけりまはる人さし人の心
尺よふたせよのちかちかあ

祐子内親王家の御

春のさかひたにけしきすのしなやまのさかひ
おきよ

大貳三位

ちりまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ
柳屋の前

從二位権左

あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ
万葉のさかひたにけしきすのしなやまのさかひ

合道おちのさかひ

うさまたのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ
あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ

大徳正行尊

あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ
あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ

信實朝臣

あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ
あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ

大貳三位

あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ
あちやまのさかひたにけしきすのしなやまのさかひ

くまのり

くまのり
并乳母

くまのり
亦大助言の母

亦大助言の母

くまのり
くまのり
くまのり

くまのり

くまのり
くまのり
くまのり

くまのり

康賢王母

くまのり
くまのり
くまのり
くまのり
くまのり

後醍醐朝

くまのり
くまのり
くまのり

後醍醐朝

くまのり
くまのり
くまのり

後醍醐朝

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

品一

交

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

和泉

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

志

前

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

克信

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

信

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title.

續千載和歌集卷第八

四薙根哥

まろしつろまよあけの人の戯はなほ

松大(ゆ)言(ま)末

比(ま)い(ま)あ(ま)あ(ま)あ

た(ま)

く(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

少(ま)野(ま)水(ま)町(ま)

ま(ま)の(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

人の(ま)ま(ま)あ(ま)あ

そ(ま)を(ま)建(ま)見(ま)

ま(ま)の(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

あ(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

あ(ま)ま(ま)

ま(ま)の(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

東(ま)慶(ま)法師(ま)

ま(ま)の(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

あ(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

あ(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

藤(ま)原(ま)清(ま)子(ま)

ま(ま)の(ま)ま(ま)あ(ま)あ(ま)あ(ま)あ

赤大船の舟

梓弓ひききりて又てくわいなるこゝとすまわ
松竹くんとり欠をうらむとてよ欠年なり。

馬内付

又ちあともり方の欠のかけいすまきりてす
題きりて

赤大船の舟

あまのこゝろの舟にわたりて舟にわたりて
山際へ通たるなり

ゆへにまた泣きふとすよと云くわいの原にける
前白の舟

ふくしすゑの舟にわたりて舟にわたりて舟

平宗直都良すよ好し。怪奇社共の首奇

海流 赤大船の舟

けさの舟をまたかいらうとて舟にわたりて舟

題きりて 平氏村

とるひる舟にわたりて舟にわたりて舟

上大人

くさむし舟にわたりて舟にわたりて舟
まゝに舟にわたりて舟にわたりて舟

新院御抄本

おのゝ又の都をたしてしるゝいふにふしむるを

可き奇しくまゝりて

松大納言

ちびりおれき入念に舟よちいふ事す月と

縁のころあまらたふ

洋守國助

流りし秋念をまよひて月とさかぬを

此くくく下はけりありしと子とんり日

ねとつけよふうつけ

大は建成朝り女

ねさよしくいふありし浦の松よむ

是ころ

藤原季實

まをまてころいふありし浦の松よむ

又伯とんり

常大納言

とんくも波ちのすゑにさかたて三つ津よむ

松伯のらとまをま

信二藤原

おこし浦よまをまの松よむ

あえ万首奇しくまゝりて

前右大臣

舟と舟とをまゝいふに浦人よりまじりてつらむ
きこふ浦と 平舟持

梅人のいふおもしろきあつまればしきしするの三浦
是より守 藤原行朝

かひあつたひをいふ梅衣より別れしつらむ
惟康親王家おまじり

梅衣といふいふ道よりいふいふいふいふ
同路行客といふいふ 和見親王

いふ人といふいふいふいふいふいふいふいふ
百首詩なま下り

前右大臣

今といふいふいふいふいふいふいふいふ
前右と大の朝野といふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ

前大僧正 藤原

あつまらのいふいふいふいふいふいふいふ
五十一 前右と大の朝野

都といふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ

梅の香のすゝ 寒信はゆ

ふいに夜曉ちりて立ち上りたるうすき月ありて人さ
る然と人

ふいに心こらして 藤原重右衛門 かく

都下いふよふありぬ年れむす可ぬあはれ

かりけし今ハ丹の敷てむすむわある年のれを
藤原の道下ありまはなる所月あ

ちよありてはかり

前大僧正朝

ふいにいひききうん年れあはれいふむすむて

カ 為道朝日

かりけしあはれありて年れいふいふいふありて

影とす 平宗直

ふいにあはれいふのれはさし曉さたてききききき

梅定等とす

平貞時朝下

きききききいふいふの年れありぬれぬの香

人くすききききききききききききききききき

梅の香のすゝ 寒信はゆ

くは衣脱ちゆく立寄りたるうすきすゝたかす人の子
了然と人

ふかき心よりして 藤原重右衛門
藤原重右衛門

都下いふよふ方々の年杖むすめあつた

かりけし今八丹の敷てむすめあつた年杖を
藤原の道下あつた事なる所月日あ

うすきしてはかり

前大僧正朝

ふかき心よりして年杖あつたすゝたかす人の子
カ 為道朝日

かりけし今八丹の敷てむすめあつた年杖を
平宗直

ふかき心よりして年杖あつたすゝたかす人の子
平貞時下

ふかき心よりして年杖あつたすゝたかす人の子
藤原の道下

人くすすきりたるは信吉社十首

梅宿風

可大仙寺先氏

等々とふ尺法にいつくちよききりぬの
名所より尺法にいつくちよききりぬの
あまらせ

源親長朝下

ひねすまの入らぬの
後のこと
中勢の字吾親王

まねいのすまむすむす
節中念の字をすまむす

平舟何

すまむすまむすまむす

題云

はる山伴

口けきつるやまむすまむす
修行しなはは道より
けり人よあつはは

とく人きす

今をむすまむす
名をす
藤原重頼

少るむすまむす
百首奇をす

入道大屋下

梅衣のさきうの紙なりや

弘安百首并のまゝのよ

ふたつうの道はよくいふ

即ち守

永福門院

梅衣のさきうの紙なりや

ふたつうの道はよくいふ

長谷のつらきせしむ

目よりてつねの急き

は京下道我

今うまひのうらみ

梅のら

日光門院入道お開自方守下

ふたつうの道はよくいふ

五人守

ふたつうの道はよくいふ

從之信官守

ふたつうの道はよくいふ

百首并のまゝのよ

お開自方守

ふたつうの道はよくいふ

お守

格衣半（？）のうきとてしる

紀深次朝下

山（？）のうきとてしる

惟宗忠章

あまのうきとてしる

惟宗忠章

草鞋つるのやとてしる

百音并（？）とてしる

月（？）とてしる

月前思故廊とてしる

太清門院御製

三（？）とてしる

格のらと

し（？）とてしる

源重氏朝

り（？）とてしる

前奉儀雅孝とてしる

丹波志守朝下

け（？）とてしる

おとあまのふしとてはる月日目の都ののころ
五十一 前参儀稚孝

いにくまはちとてはる月日目の都ののころ
前中御言定房家にて行のたをといふ
とよこはりの 藤原清忠節
わつともとてはる月日目の都ののころ
秋のたあまのころけのた中ふと

元いゆまはちとてはる月日目の都ののころ
おとあまのふしとてはる月日目の都ののころ
前中御言定房家にて行のたをといふ
とよこはりの 藤原清忠節
わつともとてはる月日目の都ののころ
秋のたあまのころけのた中ふと

都まてとてはる月日目の都ののころ
藤原基行節
わつともとてはる月日目の都ののころ
秋のたあまのころけのた中ふと

まよ大の浪の岡とてはる月日目の都ののころ
院稼行と 惟字先吉
らよとてはる月日目の都ののころ

額とてはる月日目の都ののころ
中厚師貞朝と
稼人おとこのふしとてはる月日目の都ののころ

賀茂景久

いせのつとむる元とてふらふとてね花の
洞院接政家百首并

深壁一院女

あねすのちひなふらふとてね花の
江本百首并

亦大仙言方氏

月よちるのちひなふらふとてね花の
平泉貞

いせのつとむる元とてふらふとてね花の
前大仙言有信

あえ百首并

いせのつとむる元とてふらふとてね花の
津守國道

あえ百首并

いせのつとむる元とてふらふとてね花の
るの廣上房

いせのつとむる元とてふらふとてね花の
源邦長朝の

いせのつとむる元とてふらふとてね花の
都衣の所入女
あえ百首并

贈従三位力子

比人てえりすまはねたまさす衣以園のむねあはれに
雪中旅のこころをさるるやねるは

今上御製

雪の年、有れ道とまねくまらぬ、まねく行

浮京旅旅の家冬十首奇合、開路雪箱

前中ゆき定家

雪はあはれ流すのいこえさしあけ火く月と光と

大は頼重こころはなかりとらり

法眼慶麩

都より三々をのむいさしうたこのころに方にとり

五年

大は頼重

こころはなかりとらりあわしうた雪はあはれ

題うす

法眼神因

ふまはれいんかけ旅人の衣をさむしあはれ

深直は所

あはれあはれあはれ旅人の衣はさむしあはれ

あはれあはれあはれはけりとのあはれ

あはれあはれ

祝部成茂

ふまきつるしるしにむかひて守の涙をかりやせにさす
前大帥言者氏あつまつりてはけののち
はけるをとりてはける

源義行

あつさの格好の夢に尺ややんよまをあらうり
る

前大帥言者氏

うらよよとよあをらうりてはけの夢に尺は湯に
あつさ

前中帥言者相

少る里の夢に尺ややんよまをあらうりてはけの夢に
あつさ

前中帥言者相

夢をとりてむすむとてぬ年枕可あねのとこおよの風
去御門院御誓

いんあの花さうとあにせとまにせとあにせとあにせと
家百子奇中核

後京極核及去大及下

方里の夢に尺ややんよまをあらうりてはけの夢に
百首奇中核

はる御誓

すきけり山ハクへをへてあにせとあにせとあにせと
格の夢をとりてはける

三河のやぶらぎのちとせのつたのむすめ
あはれなる御
あはれなる御

あはれなる御
あはれなる御
あはれなる御
あはれなる御

あはれなる御
あはれなる御
あはれなる御
あはれなる御

續千載和歌集卷第九

神祇哥

建長五年住江御幸はて行棧述懐

よもよも講をいしはげのしすやたきり

後漢院御製

あはれなる御代より守りし松のしせとよま

大宰権帥為経

いふ世にまたあはれなる御代に

前右の巻傳方彦

よもよもやぶらぎのちとせのつたのむすめ

江中八年任江津幸任て松方より編
せしはけりよ
小春入道おたはる

下松の千とやとゆきすし年のたしや
信吉の國平大宰院工部丞親を
とて松のえとまつてはけりて又て女
のりて
常盤井入道おたはる

千とやとのつとれとよとすいやりつ信吉の
信吉の社を治りありて宮林從祝とい
つとるはけり

権中納言藤

信吉の松とよと代りあひて千か下まとい
本社さうして一兩といのこり

津守國詮

さねたあといとのと水身ゆとていへん
皇太后宮大夫後成

おとひて下代とよと天原りてしんら
見しす

定行や下代へ入行きしゆとあひて霜の
津守國道

契ありてつらふ邦のこゝろをハねせしはてめに漢介
玉津傳子まゝしてこゝろはける。

前大納言お家

又まことと海をやり玉付鴉合しあるむる文を抄せ

源氏朝トす存ける玉に為社十五首

の可し

前大納言お家

三き鴉やまんとおれ致せまてんげの邦のまゝの

別をくす

前大納言お家

い、此浦やとにらるわしと今元とすつて津路に

津守國助

い、此浦はとてしるの文様はせよまはるる

道方太公下家十首文は述懐

二十い、もこい、い、はるまゝし、おまを致す

春日社、い、ま下ける歌中し

前大納言お家

い、此浦はとてしるの文様はせよまはるる

亦同前大納言お家

山形ちい別家、い、代、の、あ、を、い、は、る、す

あ、と、こ、ろ、を、い、て、お、り、い、に、い、け、る

前信玄実能

前僧正實能

後京極権近前大進下
る焉

若文部之にちりて存らるる

中臣祐春

相承彦
中臣祐春

つすますありてむさく

はさるる

権大僧都公順

題之
前大僧正禪助

今しねありあはむ
は皇師親

しるふこのは
二品に親王家立十首
前中納言経純

冬より

し安んず首号してまゐりける時

金蓮大居士ト

香中わいとの秋村中へて冬ころ井の三ノ石

光明寺金蓮を授取内た下子仔々の家上

可や奇らうこは(り)り

従二位家隆

ろつちの井のむろのますくアのけいこよん

影さす

法性金蓮を開自をたす

祇多やむんぶの郭とまきいあまのあま

とあわの目とつわ仔ける人のるす

伏見院御教

よ何んぬるんぬりまよア神代さする月

恵助は親王

すも月けをらうす何にこおせまうる

大徳安まうてら欠仔ける

け下密信

いす何んぬる有れ非せすらまよまの月

頭さす

慶會行達

よしきいあまのいこのりんこい

若木田氏

の儀をのりいする

前中納言定家

天仁元年身羽院の御山太皇太后御上
方御年寄音高山よりある

前中納言定家

康治元年身羽院の御山太皇太后御上
方御年寄音高山よりある

前中納言定家

正慶二年新院御山太皇太后御上
方御年寄音高山よりある

前中納言定家

正慶二年新院御山太皇太后御上
方御年寄音高山よりある

前中納言定家

正慶二年新院御山太皇太后御上
方御年寄音高山よりある

前中納言定家

續千載和歌集卷第十

釋教寺

言提心論日、漸加至十五日圓滿每早此
心よりまやたまりけり

は皇御製

日よりてかけはかりしをむす月かたよりす
三摩地現存

月のさちにとてしをすあともぬけいり
十付心論の用内庫権實

真如親王をとりてはけり通事

はけ大師

かゝり達磨と云れりきこりけ改多湯多生
観音院より久はり

は僧の智弁

観念の心より山風と常平我降しころきたり
忘買より浪のさけりて

大僧の明寺

その浪若空を我こはけりともまけいふす
如伏八月霧の細清浄元のかたより

前大僧正實良

きりなきまらむ程のれいしん
妙観密智入ん

法京守禪

きりなきまらむ程のれいしん
然州自沈三菩提也過一切心也

前大僧正公澄

三月のまらむ程のれいしん
大自修成就地不を垢物清淨圓鏡
双前 然上人

きりなきまらむ程のれいしん

島羽院御時不をて約たり又を然て養

仔たり 覚鏡上人

まらむ程のれいしん

浄女事 島羽院

まらむ程のれいしん

真言院乃花を以ん

法身御教

まらむ程のれいしん

浄女

前大僧正禪助

三つせしちりちわと九重たのうをいふる人さ
有室不二心

はる道我

む方しあらしん
今更まるといふる者

法華經序品照于東方

入道親王の口

春の分りて
はりのむひるゆき

我見妙明師在光臨如斯

源有長郎

いり欠三夫のええ
今七三のええ

方便の漸に積切徳

け眼親珍

すころめしゆ
おのころのしん

母の周を子に華經と
いふと久て

表紙の海に
まきこのらし

前津御言定家

杉ますよあけ
いふる

譬言命

と米院御繫

いふる車に
おの家の

信解名聲如童子初稚女識乃心

法華定方

そとこらむすむきけちあけまきいしけちりし
薬草論品 花の野ハ

僧都源信

ひきまらきし雨し多むつ三草二本と林さ
待賢院中仙言人くすま任ては草經
サハ不哥りも任けりま授記品於未束
世咸得成佛の心と久はけの
皇太后宮大夫後成

いふわらわりのりんさきてまへえ世にまきま
女樂行品除入禪定見十方佛

まらちりいれりまよりわれいさきぬえとら
涌出果從地而涌也

は水のりこまりいつはらまぬいそいよにきま
壽量品仰是處し彼處他國

き下し多き女の三山のふれにまのふりけり
方便双漫擊る実不減度

持大僧都隆例

きりこりこりせよとせよのふらふらだわの月日
勸教品乃しと

江原成運

又ぬ人のたれとわたりぬ橋かたをたのむ
諸行皆常果生滅けしよと

前大僧言太家

ふちぬせよとつてのきぬけしよとす
仁生經説空果と久行けお林と

前大僧云忠源

まぬまはせよとつてのきぬけしよとす
まぬまはせよとつてのきぬけしよとす

又即是空のり

磨西上人

くましちきよとつてのきぬけしよとす
不妄語戒をらと

権大僧都嚴彦

年がらつてくましちきよとつてのきぬけしよとす
年撃ひと

権十僧都頼珍

くましちきよとつてのきぬけしよとす
唯識論智とくましちきよとつてのきぬけしよと

前大僧正良信

その心も先づ心守元とすすぢの成る目
心清浄故有情清浄

覺懐法師

いふちきしはらふとせりてふの木の
未得共覺恒處夢中

浄下實壽

いふやね心もやみぬとすすぢにまゝ
日流し覺知一心生死水并とす
浄下源俊

とすすぢ心元とすすぢの成る目

住持性寺入道前南白舍利禪師

しと十如是の奇とすすぢの成る目

お中助言定家

又るわきも若まらぬとすすぢの成る目

五百才子の品 九條方右大臣

おろきりいふとすすぢの成る目

浄下実実

またわきも若まらぬとすすぢの成る目

勸持品 西行法師

いづれに根を以て妙なるを以て釣てはるるなり

三尊聖の 通基法師

下なるにすまじきすまじきなりしれはるるの月を以て

権律師澄世

未の母よりしてはるるの月を以て

妙音の 中阿含定隊

名にてあはれはるるなりしれはるるの月を以て

松は性寺入道お白右大臣はるるの月を以て

利阿右大臣

あひさきののりてはるるの月を以て

普門品種の諸悪趣

源兼光朝下

つらみといふなり道にまよふるを以て

言語道断心行所滅と云ふ

前大僧正忠源

今のみよす道にちるるの月を以て

性助は親王かたわりの眼行所は尋
経をかきて供養せしむるなり

前大僧正禪助

きんちゅうしんすえいしんふくさく
前大徳言の家ヲまかりてなすつに大徳
カはぬけ経のまはるはあまのまはるは
後之位はく

青早こみかむのわとに渡やうてあまのまはる
一品終るまはるはあまのまはるは

皇太后宮大夫後成
思順と人肩とあわてまかりてまはるは
たまりせけ
後漢成院即黎

だんしんあまのまはるはあまのまはるは
世重壽經易注る人乃んを

西行は師下

にんしん月とあまのまはるはあまのまはるは
猶如淨水洗淨塵埃

亦大徳言の家

観心量壽經王宮令乃んを
日胤上人

春のまはるはあまのまはるはあまのまはるは

日想觀應當專心擊念一處

照空上人

半二之いりんれれ元とすらにのせんてん

好鳥羽院下野すらねけ十六想觀の

まゝ水想觀と

亦大細言なる家

ろこきよすます心の水のねよむす水もあてらる

光明遍照十方世界といへり

源空上人

目けのいそね里の方をわらわちわりの心を

下品下生いふと久はけり

蓮生法師

道十ちのすあつる方集十月公のね下ぢらすとら

佛用亦告知方便息と

順空上人

そとてすきこし後の山様をわなよ今もせとら

阿旃陀經常作天樂のらと

依頼朝

十五のねよともしてそくはよふはこちてとせし風

往生論水離心悩

ろくしとらと地を早んてんそつ入よの心とら

法下聖覺説けし存りし銀までからすの
意は方て水精乃念珠をまてつかりの

前大僧正成賢

お手はつすおこまをくろあをひも玉と崇まらるる

五十一 法下聖賢

とてつらの玉の光までいも世乃やこしとせらる

真言の身相なるおまてのら詞いす

かていとい多しとトはるくあま

前大僧正道實

かていとい多しとトはるくあま

前大僧正澄谷川のつらむと方おとあて
依けりしを傳けのにはてまたおてい

権僧正植守

むすおておまのくろまよまふ列は流まてい

代くお漁こまにさるしとてと大僧正

前大僧正澄飯

あるれらり林の梢こまおのりすこま

田宗寺は華舎たうとこまおのりすこま

りておれいこまおのりすこま

前大僧正定海

思事や庭の月を十丈のりてとくに一庭ありて
題する

前大僧正禪助
たしすよこしき代はけの道むらうらふかたに
可くすきわをためてす

法皇御製

きつねいづる風のけしきをいふ
あえはそきいふ

前大僧正道玄

つらむにちよとあはねしうらなふまきこの衣
久衣百首前してまるくあはれ

待賢門院堀河

あきつよまよしうらなをわけて見よとをすけりし
秋衣百首

法皇御製

まよひしあはれらむとけきてこの月をいふ
人のけ久らわてはるる衣

法皇御製

左明はるかちうらな月をいふ
むすす

従三位宣子

子らえは火のふすまきしやわら月をいふ
身所玄

~~~~~光~~~~~月~~~~~  
~~~~~光~~~~~月~~~~~  
~~~~~光~~~~~月~~~~~

宰相典作

~~~~~(~~~~~)~~~~~  
~~~~~(~~~~~)~~~~~

淡天門院

~~~~~  
~~~~~

前大僧正親源

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

前大僧正慈鎮

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

六半首首可なりてまゐりしりい

入道名大徳下

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

夫者のみと 衆賢は親王

まゝにせしむるまゝなりてまゐりしりい

大僧の禪助

まゝにせしむるまゝなりてまゐりしりい

法下後基

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

心部て実者

せしむるまゝなりてまゐりしりい

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

前大僧の承宣

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

僧の覺因

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

造二品教王性助

ふねつり道にちいまのまゝなりてまゐりしりい

くわいしはなまきりけしここのふあつた  
ふたに年ばむす野山は清き所  
代てあつたこしつた花集にむか  
たつたあつたあつたあつた

僧の道順

いっこのふあつたあつたあつたあつたあつた  
いっこのふあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

覺鑊上人母

あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

漸空上人

あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

軟空上人

あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

如空上人

あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

律師永觀

世すて阿比陀にてけととの心をとりにとるわ

千觀法師

初樂入此路の古公すたつてりる三人はあ

百そき方とてりありし所

入道おちほ下

ひままのきよかのもたたるやいなれまいのう藤

坂川ちた下電居寺はまありて音久久所

管厚在良耶下

葉のそとわたすにあわかはてして嬰さら

高水入菴室のまし藤をるるたかとスて

二宗は親王覺は

藤のむらまんをれ久らわい心よけて年とるうり

賞性は親王親音と聖電十のをしてまり

りてあのらや音十らじいらうとららんん

してはけらるらうらららの

其後

世はまのいをれたりけりあ里十の月やいとるし

八通二品次王覺性

一とらいらの月十葉乃をいらにうららら



前大信及送主

心 國

Decon. 1848/1849

Handwritten notes in cursive script, including the word "Shake" and other illegible characters.







